

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：32414

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13952

研究課題名（和文）長時間介護サービスを利用する障害者の「生きづらさ」と介護関係に関する研究

研究課題名（英文）Research on the difficulty of living of disabled people who use long periods of time assistance services and their relationship with attendant

研究代表者

金 在根（KIM, JAEKEUN）

目白大学・人間学部・専任講師

研究者番号：10780504

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000 円

研究成果の概要（和文）：長時間介護サービスを利用する障害者は、自己決定を尊重する介護者より一緒にいるときに居心地の良い介護者の方を望んだ。この結果から、長時間他人と一緒に生活するうえで抱える生きづらさは居心地と重要な関係があることが分かった。

介護者は居心地の良い関係の次に、充実した生活を送る障害者が望ましいと考えており、それは、障害者の自己決定及び自立した生活を抑圧する要素として作用するのみならず、障害者が求める居心地の良い関係形成にも影響すると考えられる。したがって、長時間介護サービスを利用する障害者の自立生活を実現するためには居心地をキーワードに障害者と介護者の両方の立場から介護関係を議論する必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

障害者の自立生活においては自己決定の概念が最も重視されてきた。しかし、長時間介護サービスを利用する障害者は自己決定より「居心地の良さ」を求めていることが分かった。この結果より、行政はサービスの支給量の保障そして、事業所は介護者の確保のみでは重度障害者の自立生活を支援することができないことが分かる。したがって、本研究の社会的意義としては、行政の福祉サービスのあり様を見直す契機に、そして学術的意義としては、介護関係の現状を把握し、長時間介護サービスを利用する重度障害者の見え隠れしている生活課題を捉えなおし、新たな障害者と介護者の関係を議論する土台になったと考える。

研究成果の概要（英文）：Disabled people who use long periods assistance services preferred attendant who are comfortable to be around, rather than those who respect their self-determination. These results show that the discomfort of living with others for long periods of time is closely related to comfort.

Next to a comfortable relationship, attendant consider disabled people who lead fulfilling lives to be the next most desirable, and this not only acts as a factor that inhibits the self-determination and independent living of disabled people, but is also thought to affect the formation of comfortable relationships that disabled people desire. Therefore, in order to realize independent living for disabled people who use long periods assistance services, it is necessary to discuss the assistance relationship from the perspectives of both disabled people and attendant, with comfort as the key word.

研究分野：障害学 障害者福祉学

キーワード：重度障害者 介護関係 居心地の良い関係

1. 研究開始当初の背景

現在、多くの重度障害者が介助サービスを受けながら地域で生活をしているが、重度障害者の生活課題を見ると介助者と関係する問題が少なくない。にもかかわらず、重度障害者の、毎日長時間にわたって介助者を介して生活するがゆえに生じる困難についてはそれほど関心が向けられていないのが現状である。また、重度障害者の生活を見ると多様な形の介助関係が存在し、その課題も多様であると考えられるが、介助サービス現場における問題解決の多くは、障害者と介助者の人間性や相性に期待している部分が少なくないと思う。

2. 研究の目的

本研究における介助関係とは、生活の主体である障害者と援助の主体である介助者が、介助を媒介にして相互に影響し合う動的な関係を意味している。本研究では、生活の主体である重度障害者と援助の主体である介助者、そしてこの二つの主体間に介入・調整を行う役割をもつ事業者に注目して、それぞれが介助関係をどのように認識し、取り組んでいるのか、さらに、その関係の中で生じる困難を調査・分析し、重度障害者の特有の生きづらさについて明らかにする。

3. 研究の方法

本研究における「介助関係」とは、社会構造の下で必然的に発生する障害者と介助者の非対称的関係を前提に、自立生活理念の実現を目指して形成する障害者と介助者の関係とする。そして、本研究では介助サービス事業者の中で自己決定を重視しているCILを対象に行った。本研究の実施に当たっては「東京都自立生活センター協議会」の協力のもとに、2018年9月から「介助関係研究会」を立ち上げ、重度障害者の介助関係における問題について話し合いつつ、アンケート調査の内容をまとめた。その後2021年8月に「全国自立生活センター協議会」の協力を得て、全国のCIL約120カ所にアンケート調査を依頼し、障害者、介助者、CILを対象にアンケート調査を実施した。その結果、CIL30、障害者60、介助者77件の集計ができた。

4. 研究成果

障害者と介助者は「自己決定の重視」より「居心地のよい」介助関係を求めている

障害者の調査結果を見ると、障害者の約7割の人が現在介助者の中で「一緒にいると居心地がいいと感じる介助者は半数またはその以下」と答えた。また、障害者の約5割の人が「利用者の生活を理解して介助している者は半数またはその以下」と答えた。他には、「介助サービス中に一人の時間が欲しい」と答えた人が約6割であり、その理由として「気疲れ」「息が詰まる」などがあった。一方、介助サービス中に一人の時間を設けたいが難しいと答えた人が23.2%であった。そして、障害者にとって望ましい介助者像は「利用者の自己決定を尊重して指示通り行動する人」より「一緒にいると居心地のよい人」の方の優先順位が高かった。

介助者の調査結果を見ると、介助者になったきっかけとして「自分に合う、やりがいがある」と答えた人が半数以上である一方、介助中にやる気を失うときが「普通にある・少しある」人が半数以上であった。そして、介助者にとって望ましい利用者像は、「居心地のよい人」が最も多く、その次に「有意義な生活を送っているように見える人」が多かった。利用者像に関する自由記述では「この人生をどう生きたいか、何をしてみたいか、など自分の気持ちと向き合っている人」「自分の人生を有意義に送れている人」などがあった。

事業所の場合、利用者と介助者の現在の関係性について、「対等な関係と言える」が48.3%、「利用者が優勢になっている関係が多い」が20.7%、「介助者が優勢になっている関係が多い」が24.1%であった。このことから、事業者は、対等な関係を除くと、障害者より介助者が優勢の介助関係の方が多いと見ていることが分かった。3者の「介助を利用することによる障害者の自己決定の実現の度合いが8割以上」と答えた割合を見ると、障害者は82.7%、介助者は72.8%、事業者は73.4%であった。

CILは障害者の自己決定を最も大事にしつつ介助サービスを運営しており、それについては、介助サービスを利用している障害者及び介助を行っている介助者も一定の共通認識をもっている。しかし、重度障害者は多数（本研究の対象者の場合、毎月に入る介助者の人数は平均11.5人であった）の介助者と付き合いながら生活をしており、その中では「自己決定の重視される介助関係」より「居心地のよい介助関係」の方を求めていることが見られた。そして、現在の介助関係において「居心地のよい介助関係」の実現は難しいことがあり、その背景には介助者の意識及び事業者のサポート体制があるように見えた。介助者も利用者と「居心地のよい関係」を求めていることは同じであるが、その他に、障害者に「有意義な生活」を求めていることがあり、その期待が叶わない場合は「やる気を失う」ことや仕事に対する葛藤が生じることが考えられた。最後に、事業者は、介助関係の主体性の現状についてやや悲観的でありつつ、その介助関係の改善のためには事業者のサポート体制が最も重要であると認識している。

望ましい介助関係の構築における介助者の当事者性

介助者からみる介助関係の主な課題は次の2つである。一つは、介助者は介助関係に対して対等な関係を望んでいるが、実際はそうでないことである。上記のように、対等な関係を望んでいる人は72.1%であったが、現在、対等な関係だと答えた人は33.8%に過ぎなかった。1970年代の青い芝の会運動に基づいた手足論の議論から始まり、今日まで当事者運動や研究で見える介助関係の非対称性の議論は「強い介助者」対「弱い障害者」の構造であったが、アンケート調査の結果から見える、介助者が認識する介助関係の非対称性は「強い障害者」対「弱い介助者」という構造である。そのような認識は「お客様」「家政婦」や「奴隷」の言葉などに表れている。介助者は障害者の自己決定に自分たちの存在が影響していることを認識しつつも、現在は障害者の方が「強い」意味での対等な関係ではないと考えており、それに対する介助のやりづらさを感じているように見える。この介助関係の対等性をめぐる問題を解決するためには、以前のような障害者からの対等な関係の要求を超えて、障害者と介助者の両方が介助関係の当事者として納得できる関係を構築する必要があると考える。

もう一つは、介助者の中で一定の数の人は、自分の人生を有意義に送っている人または、充実した人生を送っている人を望ましい利用者像と考えていることである。「有意義な人生」や「充実した人生」などは抽象的な表現であるが、社会において望ましい人の生き方とされることがある。以前、障害者運動の中で、障害者の自立における最大の敵として親を指摘したことがある。それは、健常者中心の社会が作り上げた、障害者を抑圧するような社会的・文化的産物を、親が社会の代わり（エージェント）として障害者に与え、抑圧してしまう構造に対する批判であった。それと似たような構造として、今度は親の代わりに最も身近にいる介助者が、社会の考えを介助の中で無意識のうちに利用者に伝えているのではないだろうか。このように、介助者は障害者の自立生活に対して最も必要な存在であると同時に、障害者を抑圧する社会のエージェントの役割を担ってしまう危険性もある。したがって、介助者は障害者の自立生活を「介助」する者としての当事者性をしっかり認識しなくてはならないと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 金在根	4. 巻 22
2. 論文標題 長時間介助サービスを利用する障害者の課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 46～48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金在根	4. 巻 8(1)
2. 論文標題 長時間介助サービスを利用する重度障害者の介助関係：相互間認識及び権力関係を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 韓国障害学会	6. 最初と最後の頁 141-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 金 在根
2. 発表標題 望ましい介助関係の構築における介助者の当事者性
3. 学会等名 障害学会 第19回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金 在根
2. 発表標題 長時間介助サービスを利用する障害者の介助関係に関する研究
3. 学会等名 日本社会福祉学会 第70回秋季大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------